

東寺本弘法大師繪傳の成立

梅津次郎

本誌第七十八號 「池田家藏弘法大師繪傳」と高祖大師祕密緣記 及び前號 「地藏院本高野大師行狀圖畫」 に於て、

私は夫々池田家藏本、地藏院藏本其他の現存弘法大師繪傳に就き多少の系統的な整理を行つて來たので、本稿に於ては引續き東寺本十卷について同様の考察を試みたいと思ふ。たゞ東寺藏本そのものに就いては、嚮に多少觸れた如く、その傳稱筆者、製作年代等に關して尙未だ根本的な検討が盡されてゐない現狀であり、私も亦それ等多岐に互る問題に關しては未だ、確定的な見解を持つてゐないので、茲では東寺本を單に十二卷本大師繪傳の一傳本として取扱ひ、他の諸繪傳との關係を考察するに留めるものである。

東寺本成立の消息を傳ふるものとして、現在のところ最重要なる根本資料を提供するものは、醍醐寺に所藏せらるゝ「大師繪詞」なる一本であらう。私は未だ斯本を親しく調査する機を得ないのであるが、弘法大師傳全集編者の記するところによれば、左の如き奥書がある。

本云已上十二卷漸々令書寫畢近比東寺新書繪詞也以御室御本并所々繪詞取捨云今度新加之編目等數箇條在之歟

永和四年九月十八日

弘顯之本

永徳三年癸亥三月廿三日於慈心院閑窓染書了

桑門俊盛

而して、斯本は繪を略して詞のみを寫したものであるが、その詞書は東寺現藏本と多少の異同があると云ふ。しかし兎も角もこの奥書に依つて、永和四年頃東寺に於て東寺現藏本と同様なる十二卷の大師繪傳が製作されたことが確認され、しかもそれは御室御本并に所々に存在する繪詞を参照取捨し、數箇條の編目を追加して、新しく製作されたものであることが知られるのである。即ち十二卷本は永和四年に近くそれ以前に東寺に於て始めて製作されたものと推定される。たゞその本が東寺現藏本そのものなりや否やに就いては猶検討すべき重大なる問題であるが、冒頭にも斷つた如く、それは私の取扱ひ得る範圍外に在り、こゝではその十二卷本構成に參考された諸本の何物であつたかを攻究するのが目的である。その意味に

於て我々が今東寺現藏本を考察の對象とすることは許されるであらう。

しからば永和四年以前に存在せる大師繪傳には如何なる種類を數へ得るかと云ふに、東鑑に記録せられる四大師繪傳なるものは暫く考察の外に置くとするも、既に少くとも左の三種の繪傳があつた。

高野大師行狀圖畫六卷——地藏院本系統

高祖大師祕密緣起十卷——安樂壽院本系統

高野大師行狀圖畫十卷——元應元年東書本系統
觀王院藏本その他

之等諸本それ自身に就いては、前記拙稿に於て記述せるところであるから、今は直ちに之等三本と東寺本との關係の有無の考察に入る。

六卷本との關係 六卷本は、前號に於て明かにせる如く、その第

四卷兩帝灌頂の條を除けば他の條目は元應本に完全に包攝せられるものであるから、その十二卷本との關係を考察するに當つては、同條によつて之を試みる他はその關係を適確には知り難いであらう。

しかるに幸にも此條の文章は殆ど全く十二卷本第六卷第三段(賢賀僧による「傳教灌頂」の條。以下賢賀の命名を借りる。)の前半に一致するものであつて、兩本の關係の存在を確かめ得るのである。即ち東寺本を基礎として地藏院本によつて校合するに左の如き一致を示す。

欽明天皇の御宇(七)・佛教はしめて我朝につたはり(七)・聖德太子の御時法門さかりに海内にひろまりしより七宗の行果は人は是をまなふといへとも兩部の灌頂は世にいま(不知とこ)たし(如來)らざる所なり釋尊滅後八百年のうちに龍猛(中)はしめて内證智を西天の境(私)にひるめ給しかことく聖教の傳來廿許代のうち大師つゝに(後)秘

東寺本弘法大師繪傳の成立

密宗を東域のあひたにつたへ給是すなはち極果(至るたひらかなる)にいたる妙道佛乘(心)に(也)る(也)秘術なり五智を一心にひらき三密を凡身に得しむ(下略)

元應本との關係 之は六卷本に重複せざる條によつて對照するに、矢張り兩者の關係の存在を推知し得るものがある。例へばその第五卷勝地福田の條と東寺本第九卷室生練行とを對照する。即ち元應本はいま親王院藏本による

大和國室生山は日域無雙之靈區也大師殊に心を留給へり萬民衆庶之薄命を救はむが爲に三國相承之重寶を被納本尊海會彼岫を安し入室弟子其所にすましむ天照大神八幡大菩薩日夜に鎮護し給ふ一天其徳を仰ぎ風雲の感盡る事なく四海其益を施して雨露の恩澤限りなし水府陸地しるもしらぬも福田に養はる動植飛沈明ても暮ても只恩澤をのみ受けたり凡奇巖怪石之千象萬形なる且筆墨之限にあらず靈樹異草之大隱無名なる悉く塵俗之境を越たりこゝろあらん人誰か欣仰せざらん哉其山之麓に伽藍あり佛隆寺と名付僧徒住持して今に密教をもてあそぶ

とあるに對し東寺本は

大和の國室生山は日域無雙の靈樞帝畿第一の淨場なり大師殊に御心を留られて密教の惠命をまし衆庶の薄福をたすけむがために青龍の阿闍梨付屬し給ふところの秘本尊を此峯にいたはり籠奉りて渡海同行の御弟子堅惠法師を此岫に住しめて修行持念し給ひけり道肝を崇給へるゆへにや神龍窟宅して靈感今にあらたなり一天其徳をあふきて風雲の感應たゆる事なく四海其益にあつかりて雨露の溫潤かきることなし水府陸地しるもしらぬも福田にやしなはれ動植飛沈あけてもくれても恩澤をのみ受たり凡奇巖怪石の勢の萬象なる筆墨もうつしがたく靈樹異草の粧の千品なる色香相兼たり誠に選佛の場として塵俗の境にあらず心あらん人たれか崇敬せざらんその山に伽藍あり菩提妙法寺となつて天長承和の頃草創ありしかとも今において基礎

石かくれて知人なし大師御入定の後縣の奥繼といひし人堅惠法師と師檀の契をなし嘉祥二年に及て國家の御爲に佛隆寺を建立せしより僧徒住持して今に密教を翫となむ

兩者を比較して必ずや兩本は密接なる關係に在ることが推測されるが、二三の異同が注目せられる。即ち東寺本が堅惠法師の名を明示せること、菩提寺妙法寺のことを記せること、及び佛隆寺の建立年代を明記せること等であるが、之は東寺本全體を讀んで知られる如く斯本が著しく他本を改訂増補せる點に關聯して考ふべきであると思はれる。

秘密緣起との關係 も亦處々に徴し得る。例へば東寺本第六卷東大寺蜂の條は秘密緣起第七卷の同條と左の如き近似を示す。即ち秘密緣起は安樂壽院藏本によると

東大寺者聖武天皇の御願佛法盛にして年久なれり然に弘仁元年に此寺に大なる蜂出來て人をさす事はなはたし其勢五六寸はかりもや有らんとおほゆ逢物はたましひを失ひさゝるゝ者はたち處に身をほろほす法を守る僧侶は命を軽くして猶寺に住すといへとも身を惜む輩は寺を捨ておほくにけさりぬさる程に學業漸く□て法命たちまちにたえなんとす誠に寺の大魔緣なりと悲みあへり公家此事を聞召て大師を彼寺の別當に補せられしかは勅に應して東大寺に住し給けり其後そ蜂も來らず成にける僧とも元のことくに歸り集りつゝ修學懈らず是も入唐和尚威德貴き故也とそ申ける

之に對して東寺本は

東大寺は聖武皇帝御願の精舍良辨僧正草創の梵閣なり靈跡ふりて年ひさしく佛法さかりにして日あらたなり良辨はしめて寺の別當に補せしよりこのかた良興良惠靈義等は等の釋門の大梁相續して寺家を執務す嵯峨の聖代弘

仁のはしめの年にをよひて大師をえらひてかの職に補せらるるこのころのことにや侍りけむ大なる蜂の勢分四五寸はかりなるにはかに出きたりて人をさすことはなはたしみるものはやかてきもけしさゝるゝものはたち所に身をほろほせり古賢の詞に人能搏暴虎不能無失聲於蜂蠆といへる思出られ侍りさるほとに法をまもる僧徒は命を輕してなを室にとまるといへとも身ををしむ凡侶はあとをかくして寺をさりにき是によりて學業やうやくすたれて法命まさにたえなんとすまことに寺の大魔緣なりとかなしみあへり公家このことをきこしめて宸襟しはくやすからすこゝに大師に勅ありてかの寺にうつり栖しめたまひしかはこの蜂なかくおこることなかりきこれによりて僧侶寺にかへりて學校林をなせり京畿の緇素をのゝ入唐和尚の威德なりと感悅せずといふことなししかあれは叡信いよゝふかくして朝賞ますゝさかりなり大師この寺にましゝしときあるひは八方結護の神をあかめあるひは三七修法の僧を奏すさまゝの法事一々にしるしかたし修練の舊跡いまにあひのこれり西室南院等これなり

この兩者、東寺本に於て補加と修飾とを見るがその根幹をなすものは秘密緣起の詞書であることは明瞭である。

以上例示せるは、その比較的明瞭にその出自の詞書を保存してゐる部分であるが、東寺本全般を見渡す時は、かゝる例は稀であつて、その編纂方法は板本行狀圖畫の元應本及秘密緣起に對する關係の如く機械的なものではなく、之は元應本、秘密緣起等の章句は、痕跡的に辿られる場合の方が遙かに多いのである。しかも編纂に際しては上記三系統の繪詞のみならず、漢文を以て綴られた多くの先行行狀記等が参照せられたことも明瞭に觀取せられ、その記述は遙かに精緻となつてゐる。それは全く再編纂と稱すべき大が、りな企劃

のもとに成し遂げられたと稱すべきものである。上掲三本に見られない項目である圖像寫經、高雄練行、八幡鎮座、舍利灌浴、東寺灌頂等は醍醐本奥書に云ふ新加の條目であらうが、他に特に目立つものとしては仙院臨幸の條がある。之は他本の高野珍瑞或ひは高野臨幸の條に當るが、東寺本に於ては第十二卷全部を占め、三段に互つて御幸の次第を日を追つて精細にしるしてゐる。以てその全般を推すに足るものがある。

而して此の記述の精緻に並行して觀取せらるゝ、いま一つの特色は、先行諸本が大師の行狀を記して、云ひ得べくんば傳奇的、物語的、であるに比しては、著しく教學的乃至哲學的色彩を濃くせることで、一面に於て時代趨向を窺ひ得る。

以上の考察は専らその詞書に就いて試みたものであるが、他方繪様そのもの、比較こそ我々にとつて興味ある課題である。しかしそれが遂行には各本全卷の撮影を必要とし、いま遽かに企て得る所でないので、覺束なき記憶に頼る外はないが、繪様に於ても他本と全く一致する如きものは稀で、他本は參考に資せられた程度と認むべき程の變更乃至創作が大部分を占めて居る如くに考へられ、かゝる事情は詞書に於ける場合と全く對應するものである。其處には本繪傳製作に際しての、密教々學の根本道場として、又當時隱然たる繪所を擁した大寺としての用意と矜恃とが漲つてゐるのを認められるのである。傳へられる如き多くの執筆者や繪師が動員されその製作に數年を費したことも亦當然であつたらう。

要之、東寺本は先行弘法大師繪傳の綜合されたものであり、尠くとも上記三系統の繪傳は参照されたのであつた。而して之以後猶多くの摸本は製作されたが、創作力を包藏せる弘法大師繪傳は恐らく斯本を以て最後とするものであらう。

私は既記二つの拙稿と本稿に於て、弘法大師繪傳に就き多少系統的な整理を試みた。而して猶整理すべき多くの問題を殘してゐる。しかし乍ら、それ等は最早枝葉の問題であつて、比較的年代の降れる製作に成る作品より遺つてゐない弘法大師繪傳が相當に早い時代に成立せることを明かにし得たことを以て満足したい。何故ならばそれは多種の祖師繪傳の史的考察に直接關係するものであるからである。若し夫れ東寺藏本そのものと傳稱筆者との關係は又別の意味で我々に切實な問題となるのであるが、それについては他日發表し得ることあるを期したいと思ふ。

東寺本調査に際しては東寺當局殊に高崎光哲師の御厚志を蒙つた。茲に記して感謝の意を表したい。